

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 12 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360027

研究課題名(和文)チュニジアの多言語社会におけるコミュニケーションネットワークの研究

研究課題名(英文)Research on communication network analysis in multilingual society in Tunisia

研究代表者

中挟 知延子(Nakabasami, Chieko)

東洋大学・国際観光学部・教授

研究者番号：70255024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、エゴネットワークを用いてチュニジアの中流階層社会の今まで見えていなかった特質をあぶり出すことを試みた。過去に社会言語学分野で研究されてきた多言語・多文化社会における言語使用に関する成果を検証することも行った。日常生活のさまざまな場面における個人の言語使用を明らかにすることから、目的の社会グループの持つ傾向が窺えた。定性・定量双方の手法を用いて現地調査から得られたデータを分析した。それにより、中流階層の人々が状況に応じてコミュニケーションの言語を使い分け、そしてこのような多言語社会がどのようにチュニジアの社会の一面を映し出しているのかについて報告した。

研究成果の概要(英文)：This research tried to find some novel features of the Tunisian middle class using ego network analysis as well as to evaluate what past sociolinguistic studies have said concerning language use in the multilingual and multicultural Tunisian society. Revealing individual language usage in diverse situations better identifies the tendencies of the general population of the middle class. We also focus on the efficiency of a mixed approach, combined methods of qualitative and quantitative data. The paper shows that the middle class change languages according to various alters under various situations and reveals how language diversity can reflect Tunisian society.

研究分野：情報科学

キーワード：社会ネットワーク分析 チュニジア 多言語社会 多言語コミュニケーション 社会言語学 言語使用

1. 研究開始当初の背景

北アフリカにあるチュニジアは、正則アラビア語、アラビア語チュニジア方言(以下、チュニジア語)、フランス語が地域社会のさまざまな側面で常用されている多言語社会であり、人々は場面に応じて複数の言語を話す複言語話者である。

本研究では、チュニジアの地域社会における社会階層の形成の重要な要因に人々の多言語使用も伴ったコミュニケーションネットワークが大きく関わっていることを明らかにしてチュニジアの地域社会の特質を示すとともに、地域社会研究分野での社会ネットワーク分析(以下、SNA)を適用した研究として事例を追加することを行った。

SNAは、比較的新しい社会科学の一分野であり、社会を構成する部分集団や構成メンバーの特徴や行動形態は、そのメンバーをとりまく相互の人間関係のネットワークで形作られていくという考えに立ち、その人に固有の属性はネットワーク分析の際のパラメータとして考慮するという分析方法である。SNAはコミュニティや社会変動などに適用されその有用性が示されている。

近年SNAは方法論的研究が多く、貧困層のコミュニティネットワーク研究としては、KleitとCarnegie(2011)によるアメリカシアトルにおける地域住民のネットワーク分析や、BishirとMarques(2012)によるブラジルサンパウロとサルバドルにおける貧困層のネットワーク比較分析がある程度で、現実の社会問題を調査・分析した研究が多いとはいえない。本研究は各社会階層でのネットワークを多言語使用という切り口から分析することで、多言語社会におけるSNAの有用性を示し、SNAの応用研究の事例を追加すると同時に、多言語社会の形成の一つの要因に人々のネットワークが大きく関わっていることを示そうとするものである。

さらに、チュニジアの教育レベルや女性の地位がアラブ諸国内では群を抜いて高いことや、少なからず存在する中流階層、観光産業の重要な位置、そして異文化への寛容さといった人々の精神などが色濃く出てくると考えられ、地域文化のケーススタディとしても興味深い。

日本はチュニジアのような形態の多言語社会ではないが、グローバル化の波が押し寄せ、別の形で多言語との共生社会が進んでいくと考えられる。高齢化社会に直面して外国からの介護士や少子化による労働力不足からの外国人労働者の確保など、すでに現在外国語を母語とする人々が日本に来てお互いのコミュニケーションをそれぞれの母語でとりあっている状況も見られる。今後一層、日本人と外国人とのコミュニケーションも増え、日常生活で日本語以外の外国語と向き合っていく状況は大いにありうる。

本研究で得られる知見から、今後多言語に対応していく日本の社会にも一つの視座を

与えると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、多言語を使用する人々のコミュニケーションネットワークがチュニジアの地域社会にどのような影響を及ぼしているのかをSNAを用いて明らかにする。特に、貧富の差による社会階層の違いで形作られたいくつかのコミュニティを対象に分析を行うことで、言語という切り口から見えてくる、地域社会の社会階層間のコミュニケーションのちがいの実態を明らかにし、チュニジアの地域社会の特質を研究することである。

一方で、研究に着手した時期からアラブ世界の治安情勢が不安定になった。テロもあり、チュニジアでも日本人が巻き込まれ、例に漏れなくなった。当初の計画では、貧困層のコミュニケーションネットワーク調査も行う予定であったが、治安面から難しくなってしまった。そこで、研究協力者であるカルタゴ大学で社会言語学が専門のMosbah教授と相談して、比較的安全が確保できてインタビューやアンケート調査を行える中流階層のコミュニティに焦点をあてて調査を実施することにした。

中流階層の社会クラスは、国はもちろん地域社会の開発のために多大なポテンシャルを持つとみなされている。中流階層の人々の行動を多様な観点から調べることは、地域研究における文化的な興味のみならず、地域開発に有用な示唆を与えることになる。

本研究では以下の3つを明らかにすることを目的とした。

チュニジアの中流階層社会は多言語社会であるのか。

チュニジアの多言語社会において、チュニジア語とフランス語のコードスイッチング(会話において、文単位あるいは一文の中で2つ以上の言語を混ぜて使うこと)はどのような役割を果たしているのか。

言語の多様性はチュニジアの社会にどのような特質を与えているのか。

3. 研究の方法

(1) 調査対象地域

現地調査の場所として、マルサ(EI Marsa)市を選んだ。マルサ市は、人口が約9万3千人で、チュニジアの首都チュニスから18キロほど離れた、いわゆる郊外の住宅地であり、比較的多くの中流階層が住んでいる。マルサ市において、中流階層を中心とした300人の住民に社会ネットワーク調査を行った。日常生活の多様な場面、仕事場、家庭などでどのような言語を使っているのかについてエゴネットワーク調査を行い、全部で3,002ペアのデータを集めた。会話をするペアをネットワークのノードとし、ノード間を結ぶエッジの属性を

使われる言語とした。また、会話をする相手としては、SNA でしばしば用いられるネームジェネレータ方式を採用し、自身で各場面でも最大5名ずつ相手を指定してもらった。

(2) マルサ市の社会階層と多言語状況

現地調査は、中流階層が多く居住する地区において住民をランダムに選び、対面式で質問して回答を得る方法をとった。各家庭を回って尋ねることや、道で会った人々などに質問をした。質問票には自身の社会クラスをマークする欄を設けておいた。表1にその結果を示す。中流階層は、上流と中流の間の階層も入れると300人中258人と全体の86%を占めた。エゴネットワークにおける相互(エゴとアルター)の間柄については、表2に示すような結果が得られた。そして、表2で示した間柄でどのような言語を使っているのかについての延べ数は表3のようになった。

表1 調査対象の社会階層

社会クラス	人数(人)
上流	13
上流と中流の間	96
中流	162
労働者	20
下流	9
総計	300

表2 エゴとアルターの間柄

仕事場	家庭	その他
友人	両親	隣人
同僚	兄弟姉妹	それ以外
上司	配偶者	
部下	子供	
顧客	それ以外の親族	
教授		
学生		

表3 使う言語の種類

言語	頻度(回)	割合%
TA	1442	48.1
CS	787	26.2
TA/FR	280	9.3
FR	270	9.0
EN	53	1.8
FR/EN	36	1.2

表3での言語記号は以下を示す。

TA: チュニジア語

CS: コードスイッチング(説明は前掲)

FR: フランス語 EN: 英語

表3でTA/FRのように二言語を“/”で結んでいる場合は、コードスイッチングのように会話の中で文単位あるいは一文中で言語を切り替えるのではなく、A/Bは、「主にA言語を使うが、B言語も時々使う」ということを意味する。なお、すべての種類は33種類あったが、全体に占める割合が1%を上回っている6種類に限り表3に示している。

(3) Index of Qualitative Variation (IQV) による言語の多様性測定

前節で述べたネットワークデータについて、Agresti(1978)のIQVを適用して、使用言語の多様性を計った。IQVは0から1の間の値を取り、1に近づくほど多様性が大きくなる。測定にはE-Netを使用した。300人のエゴネットワークでの使用言語におけるIQVの分布は図1のようになった。図1で横軸はIQV値を、縦軸は頻度を表す。

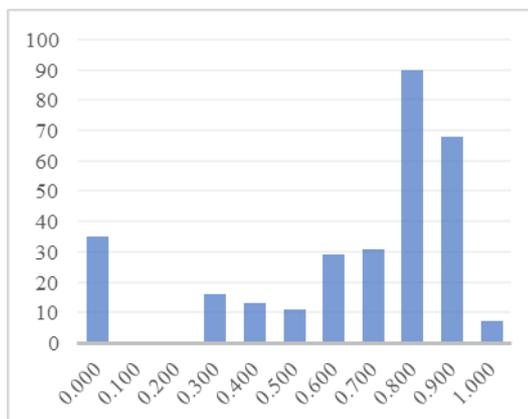


図1 IQVによる使用言語の多様性測定

測定データについて、平均は0.70、標準偏差は0.303であった。図1からも明らかであるが、多様性の大きい方にデータは偏っている。統計量としてカイ二乗検定による適合度の検定を行ったところ、自由度8でカイ二乗値は338.34、p値は2.78E-68であり、有意水準5%としても統計的に十分有意であった。よって、IQVにおいては使用言語の多様性は大きい方に偏っており、マルサ市での調査対象の人々については多様な言語を日常的に使っていることがわかった。

(4) コレスポネンス分析

表2で示したエゴアルターの間柄と使用言語の関係を把握するために、コレスポネンス分析(correspondence analysis, CA)を用いた。3,002ペアのデータの中で、表3で示した上位6種類の使用言語に絞った2,872ペアのデータについてCAを行った。

14 種類の間柄と、6 種類の使用言語による分割表が生成された。分析には㈱社会情報サービスの「エクセル統計」ソフトを使用した。

CA の結果、5 つの軸が得られ、第 1 軸と第 2 軸が 84.91% の寄与率であった。カイ二乗検定においても、第 1 軸と第 2 軸のみ p 値が 0.001 以下であり、統計的に有意であった。そこで、図 2 に示すように、第 1 軸(F1)と第 2 軸(F2)を用いた二次元空間にエゴアルターの間柄と使用言語を配置した。

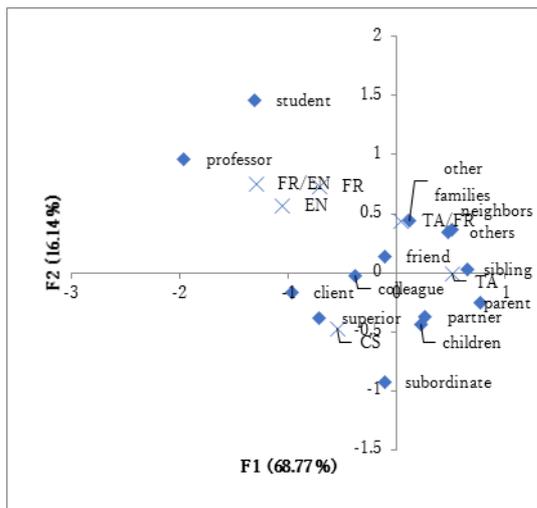


図 2 コレスポネンス分析結果

図 2 の分析結果から、以下の 2 点を導いた。

- 第 1 軸は、いかに豊富な知識や情報のやりとりを表す情報性 informativeness の軸といえる。professor(教授)と student(学生)は対象者がどちらの役割であっても、有用な知識を授受するという事に変わりはない。その際に使う言語はフランス語や英語、あるいはその併用になっている。
- 第 2 軸は、非公式な社交 informal sociability の軸といえる。対象者にとって親密さの大きい相手に対しては、チュニジア語やフランス語を用いる。ここで非公式という意味は、職場や学校のような給料や学費などの金銭や組織での利害関係がないということを想定している。

以上の点はある程度想定できることではあったが、調査をしていった過程で、予想以上にフランス語が人々の生活に浸透していることを感じた。第 2 軸にもあったように、友人間ではフランス語で話すという場合も少なからず見られた。また、家族という極めて親密な間柄の会話であっても、配偶者や子供にはフランス語を話す機会が多い人も見られた。このことは中流階層の生活文化を反映しているのではないかと考えられる。

4. 研究成果

上述した分析手法やアンケート調査と機会があれば合わせて行ったインタビューの結果を用いて、本研究では 2 章で挙げた から

の 3 項目について分析を行った。以下、各項目にしたがって分析の結果を述べる。

(1) チュニジアの中流階層社会は多言語社会であるのか。

3 章の(3)で述べたように、エゴネットワーク分析と IQV を用いて分析したところ、日常のさまざまな場面に応じて多様な言語を使っていることが分かった。種類として、チュニジア語と、それと合わせたコードスイッチングが主なものであった。チュニジア語は母語であるため使われるのは当然のことではあるが、それに加えてフランス語や英語をはじめとする別の言語を自在に混ぜて使っていることが分かった。マルサ市という限定した地域での調査ではあったが、チュニジアの中流階層社会を見る有効なケーススタディとしてとらえることができることから、チュニジアの中流階層社会は多言語社会の一面を持っているといえる。

(2) チュニジアの多言語社会において、チュニジア語(TA)とフランス語(FR)の使用に際してコードスイッチング(CS)はどのような役割を果たしているのか。

マルサ市の中流階層の人々が日常生活において CS を使う時には、4 通りの場面があることが分かった。ここではインタビュー調査を通じて得られた考察も取り入れつつ述べる。

場面 1

CS が専門や職業上のコミュニケーションで TA に補完的な役割を果たしている場合である。科学技術の分野では FR の単語が主に使われている。図 2 に示したように、FR と EN は professor、student、client(顧客)、superior(上司)の近くにあり、このことを如実に表している。それでは、CS のような一部混ぜるのではなく FR や EN で会話することが場面にふさわしいが、人々の FR や EN の流暢さが十分でないため、TA との CS になるといえる。また、単語レベルであっても FR や EN で伝えることができれば、専門分野の情報はかなり伝わることもある。一方で、職業上の会話では、外国人観光客に対して FR や EN を混ぜて使うことはビジネスを円滑に進めるための道具になる。チュニジアではアラブ諸国以外にもヨーロッパ方面からの観光客をさかんに受け入れる努力をしているためである。

場面 2

CS を「self-confidence 自信」を掲げる道具にしていることである。ここでは特に TA に FR を会話に混ぜることになる。インタビュー調査で直接生の声を聞いて分かったことである。人々は会話の相手に FR を混ぜることで自分の教養の高さを誇示

したい。また、現状の自分の置かれている生活レベルは自身の知的レベルには釣り合わないで、本来はさらに高い階層にいるべきなのだということを相手にわからせたいという気持ちも含まれている。

インタビューでは人々はリラックスするにつれて様々なことを話してくれた。チュニジアの政治や経済、そして好きなサッカーチームのことなども出てきた。その際に彼らはフランス語を混ぜて使っていた。確かに文法や単数複数、男性女性名詞の間違いなど気がついたが、そのようなことにはおかまいなく彼らはTAにFRを混ぜて饒舌に話していた。FRの単語を混ぜることで、高い教育を受けていることやトレンドな文化に詳しいことを示そうとしていた。そしてかなりの長い間CSを日常に使うことで、CSが人々のごく一般的な会話のスタイルに定着しているように感じられた。

ここで、図2を振り返ると、CSの回りにはcolleague(同僚)、superior(上司)、subordinate(部下)といった職場での間柄が見られる。特に注目したいのは、同僚との会話にCSを多用していることである。人々にとって同僚には2種類の人々がいて、ほとんど友人も兼ねている人と単なる仕事上のつきあいしかしない人がいる。CSは後者に対しても使われており、自身の洗練された教育や文化レベルを表現する道具になっている。また、職場では社会階層は必ずしも均一ではない。中流階層以下の人々にとっては、CSは自分より高い社会階層の同僚と会話を潤滑に行うという役割もある。

場面3

CSを家族のメンバーであるpartner(配偶者)やchildren(子供)に使うときである。図2における第2軸はinformal sociabilityの度合いを表しているとして述べた。家族であればその度合いが大きいということは明らかであり、母語のTAが通常用いられることは当然であるが、その中でも配偶者と子供に対してはCSも使うということについて考察する。

インタビュー調査で得たことであるが、中流階層の家庭では多くの夫婦が長期あるいは短期でフランスに留学経験があり、流暢にFRを操っている。また、彼らの子供たちもフランス系のミッションスクール(lycée リセ)に通っており、そこでは多くの科目がFRで教えられている。このことが配偶者や子供にCSが比較的近く置かれていることを示している。FRが流暢な夫婦は、子供たちにもFRに幼少時から馴染ませしておきたい気持ちが強い。そこで子供たちとの会話がTAとFRのCSという形で表れてくるのであろう。リセは中流階層以上のいわゆるチュニジアにおけるエリートの子弟が集まっており、メンバーは密度の濃いネットワークを形成している。リセを経た子供たちは流暢にFRを使いこなし、深い感情までも母語であるTAではなく

FRで自然に表すまでもなっている。若者の間でこのようなエリート層とそうでない者との社会格差は大きく、この格差はFRが話せるかそうでないかということにも表れている。

場面4

CSはコミュニケーションを気軽に迅速に進めるための道具である。図2でfriend(友人)やcolleague(同僚)の回りにTA、TA/FR、CSが置かれている。ここでいう同僚がかなり友人のような立場であることと考えると、気を遣わないしかも家族のような親密すぎない相手に対してもCSを好んで用いることがいえる。特に若者同士で流行の文化を話したりする際には最も使いやすい形なのであろう。インタビューでも、若者にとって英単語はクールに響くそうである。また、フランス単語でしかぴったり伝えられない感情やコンセプトがあり、その場合にはCSでないと難しいことも聞いた。

(3) 言語の多様性はチュニジアの社会にどのような特質を与えているのか。

本研究はこれまでの経緯から、中流階層の人々に焦点をあてたものになったが、いくつかがことからはチュニジア社会全体にもあてはまるといえる。

調査対象地域のマルサ市では、多くの人がフランス語を話せることは優越を示すことと等しいと考えている。しかし一方で、このような優越性について過度になることに不快感を覚える人々も少なからずいる。ある住民から聞いたところでは、マルサ市は歴史上古くから中流階層以上の人々が多く住む土地であった。しかしながら最近では昔の栄光はなくなりつつあり、生活状況は日々悪化しつつある。人々はずっと持ち続けてきたプライドから、突きつけられた現実を認識することを恥じており、そのことがフランス語を話す=教養のあるセレブなコミュニティの、プライドをかけた維持ということにつながっていると考えられる。

チュニジアでは多くの中流階層以上の人々は外国特にフランスで教育を受けている。彼らはその後帰国して国内で政府や民間企業での高い地位につくというエリート層を形成する。子供が将来いわゆる「勝ち組」になれるかどうかは、どのような教育を受けられるかにかかっている。教育によって、外国語特にフランス語をいかに上手に使いこなせるかがカギになっており、社会階層の上下はフランス語の運用能力で分けられているともいえる。

現地調査では中流階層よりも生活水準の低い労働者階層の若者にも多くはないがインタビューすることができた。彼らはフランス語をひけらかすエリート層の若者に憎しみに近い感情を抱いている。格差社

会は小さな頃からすでにどのような教育を受けられる学校へ行くことから始まっており、フランス語がその格差の一因になっていることが分かる。ただし、前章で述べたように、労働者階層も中流階層と同じ職場で顔を合わす同僚になることも多く、その際のコミュニケーションの道具として CS は重要な役割を成している。

ここで、チュニジアで現在日常会話では用いられていない現代標準アラビア語 (Modern Standard Arabic, MSA) の状況について述べておく。MSA は新聞やテレビ、また学校でのアラビア語の教科書で用いられている。しかし、授業で使う言語は TA である。MSA は他のアラブ諸国の人々とのコミュニケーションに使われている。ただ、チュニジア人にとってのビジネスパートナーはフランスをはじめとする欧米諸国であり、その際に使う言語は相手国の言語である。ビジネスの成功のために人々はますますフランス語・英語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語などに習得の価値を見出している。

かつて Daoud (1991) が述べたように、チュニジアの社会は 1956 年、フランス保護領からの独立以来、一部の支配層の言語政策に振り回され、自分たちの文化アイデンティティの拠り所はどこにあるのかを見出すことに常に向き合ってきた。支配層の提唱したアラビア語化は人々の文化的経済的背景をまったく考慮していなかった。同時に社会格差を引き起こし、チュニジアの社会を悪化させたのである。

最後に、チュニジアの今後の多言語状況に目を転じて結びとする。チュニジアはここ最近ますます若者の英語学習熱が高まってきており、すでに小学校でも教えられ始めている。フェイスブックなど SNS の爆発的な普及と相まって、コミュニケーションのための英語を使う機会が増えてきている。インターネット上での表現の自由さに人々は今後もより一層英語を使うようになると考えられる。

< 引用文献 >

Agresti, A., Agresti, B., 1978. Statistical Analysis of Qualitative Variation. *Sociological Methodology* 9(204), 204-237.

Bishir, R. M., Marques, E., 2012. Poverty and Sociability in Brazilian Metropolises: Comparing poor people's personal networks in Sao Paulo and Salvador. *Connections* 32(1), 20-32.

Daoud, M., 1991. Arabization in Tunisia: The Tug of War. *Issues in Applied Linguistics* 2(1), 7-29.

Kleit, R. G., Carnegie, N. B., 2011. Integrated or isolated? The impact of

public housing redevelopment on social network homophily. *Social Networks* 33(2), 152-165.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

Chieko Nakabasami, Social network approach on multilingual society among middle class people in Tunisia. 東洋大学大学院紀要第 54 号、査読無、2018 年掲載決定

中挟 知延子、多言語社会におけるコミュニケーションモデルの一提案、情報処理学会研究報告ドキュメントコミュニケーション、査読無、2017-DC-105、2017 年掲載決定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中挟 知延子 (NAKABASAMI, Chieko)
東洋大学・国際観光学部・教授
研究者番号: 70255024

(2) 研究協力者

モスバー サイド (MOSBAH, Saïd)
カルタゴ大学言語学部・教授